

# 脱ぐ・着る・着替える

村石理恵子

「着替える」ことには、「脱ぐ」ということと、「着る」ということの両方の意味があるでしょう。幼稚園での「着替える」は、「脱ぎたくない…」から始まるようです。

## 脱ぎたくない その一

ある年、紙おむつのままで入園してきた三歳児のAちゃん。早くに保護者からは離れられ、自分から遊んでいても、トイレには行きませんでした。遊びの切れ目や、ほかの友達がトイレに行く時に、一緒に誘っても、行きません。降園前、ふとじつとして

いるAちゃんのおしりの辺りが何やらふくらんでいました。紙おむつが吸水している様子です。パンツ（おむつ）を取り替えようと誘うと「でてない」と言うAちゃん。そのかたくなな表情、態度。遊んではいても、まだまだ幼稚園に慣れていないのです。

降園時に保護者に伝えると、家でも、でたことを知らせないとのことなので、保護者と密に連絡を取り合うことにしました。

そして、家で母親となら一緒にトイレに行くようになったと知らせがあったのは、ちょうど気温が上がり水遊びの楽しい季節でしたので、保護者と相談

して、いよいよ園でもパンツにすることにしました。Aちゃんが服のまま遊んでいて水がかかった日、服もパンツも取り替えることにしました。その際、ついでにトイレに行ってみることにしたので。この日から、Aちゃんがおむつをはずし、パンツをはいてトイレに行くという流れができました。

排尿できるようになるとAちゃんは、「家に帰りたいくない、もつと幼稚園で遊ぶ」と降園を渋るようになっていたのでした。

三歳児のBちゃんは、「でた」と、にこにこしながら漏らしたことを伝えてきます。服を脱ぐ手伝いをしながら、保育者がおしりをふいていると、そのままストンと保育者に身を預けてきます。そして、ひざに乗りながら、パンツを自分で引き上げようとするのです。少し手を添えると、パンツがはけます。はいたパンツに満足そう。Bちゃんは、漏ら

すたびに、にこにこ着替えるのでした。一か月ほどたつて「でる」と事前に伝えるようになったBちゃんは、お漏らしでは着替える必要が無くなりました。すると今度は、遊んでいて汚れた服を着替えることになってきたのです。その着替えも、にこにこ笑顔で取り組んだBちゃんでした。

排泄の自立、という大きな節目を幼稚園入園後に体験する子どもが増えていきます。もちろん、緊張して、入園前には家庭でできていたのに、幼稚園ではなかなかできずにいる子どももいます。漏らす、ということは、「脱ぎたくない」気持ちをはっきりと表したり、保育者と一緒に着替えることでさっぱりとした切り替えになったりして、大切なきっかけとなります。子どもが自分で着替えるという場面を、保育者の手を借りながらつくりだしていくことは、家庭で保護者と過ごす生活ではなく、幼稚園の生活

はまさに自分の生活なのだと思覚することだと思  
います。

## 脱ぎたくない その二

身長・体重の計測の日。服を脱いで行うことに不  
安や恐れを抱く子どもがいるのは、当然のことだ  
しょう。保護者同伴の計測であっても、服を脱がな  
い、体重計に乗らない、という新入園児もいます。

その場合に、保護者や保育者と一緒に体重計に乗っ  
て、あとから大人の分を差し引く、などということ  
もありました。初めての体験に涙ぐんでいた子ども  
も、終わると、「なあんだ」といったほっとした顔  
になるのですが…。

さて、四歳児のCちゃんとDちゃんは、進級して  
初めての発育測定の日、「脱ぎたくない」と言いま  
した。二人とも三歳児の三月の計測では、服を脱い

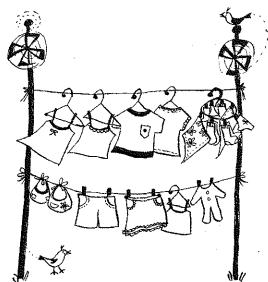
でいたのに、進級して  
新しい学級での初回、

そんな気持ちになった  
のです。靴下を脱い

で、裸足になることだ  
けはしたものの、その

日は着衣のままの計測になりました。私は養護教諭  
と「脱がないんだね」と顔を見合わせて笑い、そ  
の状態を受け入れることにしました。特にDちゃん  
は、三歳児の一年間、自分のカバンを肌身離さず遊  
んだり、集会で遊戯室に出かけるときにはぬいぐる  
みやバッグ、クレヨンなどをしっかりと持ち歩き、  
むしろ「さらに身につける」ことが多かったので、  
私も重さを増すような物を持っていないならいいと  
思ったのです。

ところが、一か月経た次の回、Dちゃんは、何も



なかつたように、ほかの友達と一緒に服を脱ぎました。この回、Cちゃんは脱ぎません。Cちゃんにつられてか、発言を聞いたEちゃんも「脱がないことにする」と決めたようです。CちゃんとEちゃんは、上着は脱いで、上半身は下着のシャツの状態でした。「やっぱり、これ(この格好)がいい」と上半身裸までいかない自分のスタイルを主張しました。

そして、そのまた次の回、今度はCちゃんも何も言わず、EちゃんもDちゃんも、さつさと服を脱ぎ、脱いだ洋服を畳むことに熱心になるほどになりました。この姿に、私と養護教諭は、「脱いだね」と顔を見合わせました。

進級して、服を「脱がない」心境から、それを強調しなくても平気になったCちゃんたち。彼らの着ている洋服は、まるで身を守る鎧だったのでしょ。強引な北風からはがされないようにする旅人の

マントかもしれません。それを解いてもいい、「脱ごう」と思ったのは、脱いでもまた着て、もとの自分に戻る見通しと安心感を自分でもてること、そして園の生活に自分らしく居られる場所や時間をもつことができるようになっていたからだだったのでないでしょうか。

### 着替える

三歳児のFちゃん、Gちゃん。ほかの子どもたちが砂を使って、小さな山を作り始めたり、カップにすくってごちそうを作ったりしている一学期のころ。やんちゃな二人の砂場遊びは、日に日に盛り上がっていました。少し前から、ついにスコップで穴を掘りだしました。この時のスタイルとしては、既に裸足になっていました。

その日はさらに、そこに水を流し込む、という遊

びを発見し、繰り返し二人は穴を掘り、そこに水を運びます。じょうろで水を汲んでくる行ったり来たりも、楽しくて、往復していると、少しずつ穴に水がたまってきました。たまった水の中にスコップを入れると、泥の水。さらに楽しくなって、水を混ぜたり、すくってみたりしていました。私は根気よくやっているなあ、と思って見ていました。そして、ちよつと目を離れたあと、「先生！ たいへん。FちゃんとGちゃんがけんかしてる」と知らせがきました。

急いで砂場に戻ると、泥の穴を真ん中に、Fちゃんは泣きそうな顔で立っています。Gちゃんは、口をとがらせて怒った顔です。「Gちゃんがかけた」「Fちゃんだつてかけた」と言う二人。どうやら、いよいよ動きが激しくなり、泥水の中にスコップを強くたたきつけたらしく、体や顔に泥がかかっ

たのです。

目や口の中には入っていない様子に一安心した私は、「二人とも、ゴマちゃんになってます。ほら、顔に、てんてんって、ゴマがついてる」と言いました。すると、ふつと表情が変わり、「ゴマだ」「ついでる」と顔を見合わせて笑うFちゃんとGちゃん。「ゴマちゃん、ゴマちゃん」と二人は節をつけて言いながら、スコップでまた水面をたたき始めました。私は「胡麻」の意味で言いましたが、「ゴマちゃん」というのは、幼いアザラシの呼び名として、どこかで聞いたことがあったのでしょう。二人はフレーズを楽しんでいました。そして、さらに裸足で穴の中に入り、バシャバシャと自分たちにかかるとを笑い合いました。けんかだと思って、ドキドキしていたほかの子どもたちも二人の楽しそうな様子にほつとして、またそれぞれの楽しみに戻ってい

きました。

一段落し、「それではゴマちゃんたち、着替えましょう」と誘うと、二人は足を洗ったり、顔を洗ったりし、いそいそと着替えに取り掛かりました。その日の降園時、保護者にもいきさつを説明すると「今日も、お土産ですね」と苦笑いしながら、着替えを持って帰りました。

「脱ぐ」「着る」が必要になってくるのは、まずは偶然のことが多いと思います。どろんこや水遊び、絵の具など、心が動き、自分でやってみたいと思つた遊びに取り組んだ結果として、汚れたり濡れたりして、服を脱ぐことになる、着替えることになる、という流れです。思い切り遊んだ後の着替えは、気持ちのよいものです。その着替えが楽しかった遊びの終わりの「(ピリオド)」となるのです。こうした着替えの体験が基になって、遊びにたつぷりと

浸っていくのです。そして、一枚の布を羽織つてヒーローになったり、忍者の帷子かたびらや妖精の羽といったものを作って、身にまとうことを楽しむようになります。いつてみれば遊びの中の「プラスαの着替え」というところでしょうか。

幼稚園では、まず、日ごろの服装スタイルで自然に振舞えることが、自分が自分らしくいられる生活の始まりでしょう。その後発生する「着替える」という行為は、時には、まるで卵の殻を割って出てくる雛のように、また蛹から羽化する蝶のように、「脱いで」次の姿を現すような、変化そのものであると感ずることもあります。「着替える」ことも自分らしくできることで、幼稚園の生活が子ども自身のものであるように、と思います。

(東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎)